

詩篇 135 篇

《賛美の呼びかけ》

- 1 ハレルヤ。主の御名をほめたたえよ。ほめたたえよ。主のしもべたち。
- 2 主の家で仕え、私たちの神の家の大庭で仕える者よ。
- 3 ハレルヤ。主はまことにいつくしみ深い。主の御名にほめ歌を歌え。その御名はいかにも美しい。
- 4 まことに、主はヤコブを選び、ご自分のものとされ、イスラエルを選んで、ご自分の宝とされた。

《自然界の主》

- 5 まことに、私は知る。主は大いなる方、私たちの主はすべての神々にまさっておられる。
- 6 主は望むところをことごとく行われる。天で、地で、海で、またすべての淵で。
- 7 主は地の果てから、雲を上らせ、雨のためにいはずまを造り、その倉から風を出される。

《救済史の想起》

①出エジプト

- 8 主はエジプトの初子を人から獣に至るまで打たれた。
- 9 エジプトよ。おまえの真ただ中に、主はしるしと奇蹟を送られた。パロとそのすべてのしもべらに。

②カナン征服

- 10 主は多くの国々を打ち、力ある王たちを殺された。
- 11 エモリ人の王シホン、バシヤンの王オグ、カナンのすべての王国を。

③カナン定住

- 12 主は彼らの地を、相続の地とし、御民イスラエルに相続の地として与えられた。
- 13 主よ。あなたの御名はとこしえまで、主よ。あなたの呼び名は代々に及びます。
- 14 まことに、主はご自分の民をさばき、そのしもべらをあわれまれます。

《偶像礼拝者の空しさ》

- 15 異邦の民の偶像は、銀や金で、人の手のわざです。
- 16 口があっても語れず、目があっても見えません。
- 17 耳があっても聞こえず、また、その口には息がありません。
- 18 これを造る者もこれに信頼する者もみな、これと同じです。

《賛美の呼びかけ》

- 19 イスラエルの家よ。主をほめたたえよ。アロンの家よ。主をほめたたえよ。
- 20 レビの家よ。主をほめたたえよ。主を恐れる者よ。主をほめたたえよ。
- 21 ほむべきかな。主。シオンにて。エルサレムに住む方。ハレルヤ。

前回まで十五回に亘って「巡礼歌」を学んできましたが、大きな括りとしては107～150篇（第五巻）の一部でした¹。今日学ぶ135篇が書かれた年代は、これまでの流れの上で捕囚からの帰還後、すなわち「第二神殿時代」と捉えてよいでしょう。神殿の中庭に集まっている聖職者と群衆に向けて賛美が呼びかけられており、賛美で始まり賛美で終わる煌然とした詩です。

1～4節：賛美の呼びかけ

「ハレルヤ」「ハレルヤ」と繰り返されていますが、このことば (הללוּ) は「輝く」「賛美する」を意味する動詞「ハーラル」を語根とした三人称複数形に「ヤー」（主）が目的語に加えられ、あたかも一語のように扱われています。「主の御名を輝かせよ」というイメージでしょうか。

最初に賛美を呼びかけている対象は「主のしもべたち」「神の家の大庭で仕える者」であって、神殿の奉仕者、祭司一同です。最後には民全体に賛美が求められるのですが、まず聖職者が歌いそれに呼応するかのように群衆が歌う、交唱のような作りになっていることが分かります。

誉め讃えられるべきは主の「御名」です。名前はその存在の性質そのものを表すことが多く、特に主の名は「(共に) いる」を意味する「יהוה/ハーヤー」から来ていますから、イスラエルと共にまですす神に栄光を帰することを表しています。

4節で「ヤコブ」と「イスラエル」が言い換えられています。いずれも同じ意味であり、父祖ヤコブをかしらとした民族、イスラエルという名が彼から取られたことを表しています（創世 32:38-29）。主はこの民族を「宝とされた」のであり、ご自分のものとして特別に取り分け給うたのです（申命 7:6）。

5～7節：自然界の主

5節後半に出てくる「主はすべての神々にまさっておられる」という表現は旧約聖書の随所に登場しますが、あたかも「ほかの神々」が存在するかのように聞こえます。しかし、パウロが明確にしているように、「この世に偶像の神などはなく、唯一の神以外にいかなる神もない」（I コリント 8:4）ことが前提として語られているのです。そして、私たちの信じる神が天地万物を創造されたことが重ねて述べられます。7節の「主は地の果てから、雲を上らせ、雨のためにいなずまを造り、その倉から風を出される」という表現は、ヨブ 38-39 章に出てくる被造世界の不思議を思い起こさせます。人には神のなさることを測り知ることができないのです。

8～14節：救済史の想起

本篇の真ん中を占めているのは、イスラエルを奴隷の縄目から解放してくださった神の御業です。イスラエル民族のアイデンティティそのものとも言える出来事、神が特別に働いて救済の道を切り

¹ 詩篇は大枠として以下のような括りになっている。

第一巻：1-41 篇

第二巻：42-72 篇

第三巻：73-89 篇

第四巻：90-106 篇

第五巻：107-150 篇

拓いてくださった出エジプトの記憶が思い起こされます。自分たちはそのような光栄ある経験をしてきた民族なのだ。神の特別な恩恵は、奴隷からの解放に留まらず、カナンの地が与えられたこと、先住民と戦って勝利しその土地に定住することを許されたところにまで及びます。

念のため、歴史認識はそれぞれ置かれた立場ごとの視点によって異なるということも加えておきたいと思います。イスラエル民族にとっては「元いた土地」に帰っていき取り返したという見方になりますが、先住民にとっては空いていた土地に住み着いていたところ略奪されたという見方となります。聖書はイスラエル民族の視点で書かれているため、主なる神の解釈、法的基準によって説明されています。

これらのことのどれによっても汚れてはならない。私があなたがたの前から追い払う国民はこれらのすべてのことによつて汚れ、その地も汚れた。私がこのことのゆえに罰すると、その地はその住民を吐き出した。私の掟と法を守りなさい。イスラエル人も、あなたがたのもとにとどまっている寄留者も、これらのいかなる忌むべきことも行ってはならない。あなたがたより先にいた者がこれらの忌むべきことをすべて行ったので、その地は汚れた。(レビ 18:24-27)

民族間の禍根となる出来事となったことは悲しいですが、ここでは「まことの神の法を知らない人々の墮落と倫理的腐敗に対する裁きの剣」としてイスラエル民族が用いられたと説明されています。

15～18 節：偶像の空しさ

イスラエルの宗教の重要な特徴は、「神をかたちにしなさい」ということ、神がこのことを固く禁じておられるということです(出 20:4)。それは、人が作り出せるものは神ではないということ、人格はなく、力もなく、人の願望の形に過ぎないということです。ミドラシュの中に、偶像に関する面白い記事があるようです。

「アブラハムの父テラは、ウルの地での偶像づくりでした。アブラハムは、ある日父テラに大小さまざまな偶像の中で、『どれがいちばん強い偶像か』と尋ね、テラは『一番大きい偶像だ』と答えた。アブラハムは父が外出していたそのすきに、その一番大きな偶像を残して、他の偶像をことごとく叩き壊しました。帰ってきた父は驚き、『誰が壊したのか』と問いました。アブラハムが『それは一番大きなその偶像ですよ』と答えると、テラは怒って、『そんなことがあるものか。これは単なる土偶人形で、そんなことができるものか』と言った。そこで、息子アブラハムは『そのとおりですよ、お父さん。そんな何もできないものを神とするとは何たることですか』といさめました。ためにテラも偶像の愚を悟った。」(小畑進『詩篇講録』下、p. 1165)

キリスト教もまた「神をかたちとする」ことを避ける教えに立っていますが、それこそがまことの神観の証と言えるのではないのでしょうか。

19～21 節：賛美の呼びかけ

最後の部分では、賛美を呼びかける対象が「イスラエルの家」「アロンの家」「レビの家」「主を恐れる者」へと広げられています。この中で「レビの家」という表現は珍しく、特に祭司を輩出する家系が念頭に置かれているようです。とはいえ、呼びかけの範囲は広く、「イスラエルの家」「主を恐れる

者」と、全体的なことが語られている中に「アロンの家」「レビの家」が含まれていることにも気付かされます。私たちもまた「主を恐れる者」であるならば、この賛美のうちに入れられているのです。

ユダヤ人とギリシア人の区別はありません。同じ主が、すべての人の主であり、ご自分を呼び求めるすべての人を豊かにお恵みになるからです。「主の名を呼び求める者は皆、救われる」のです。

(ローマ 10:12-13)